



TITLE:

心の痕跡

AUTHOR(S):

桑原, 武夫

---

CITATION:

桑原, 武夫. 心の痕跡. 静脩 1966, 3(3): 1-2

ISSUE DATE:

1966-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36340>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

# 静脩

1966年 8月

Vol. 3, No. 3

## ご あ い さ つ

安 戸 圭 一

先般の図書館商議会で、はからずも館長の要職に選挙せられ、内規に従って、総長より委嘱、7月25日付で任命の発令があった。自然科学系教授としては、本学最初の館長であるが、旧帝国大学にあっても、現在、東大、阪大、九大などに例があり、先輩の堀江前館長からも、そんな意味も含めて激励されているので、何とか責をはたしたいと思っている。

生来理科系の、実験を主とした学問をやっているもので、図書については、門外漢とは言えないとしても、大した知識はない。しかしこの方は、先輩、同僚各位のご援助に待つことにするが、工学部の知識を生かした方面で、何か技術的に役立つ方面にも働らいて見たいと思っている。

差当っての目標は、学生諸君一般が利用する閲覧室を気持ちよくすることである。私所属の工学部工業化学教室のご好意で、飲料水冷却装置をゆずっていただくことになったのが、小さいことであるが、先ず手はじめである。目下各方面にご援助をいただくようお願いしているのは、200坪のあの部屋に冷房装置を入れることである。何分莫大な金額になることなので、困難も多いが、取敢えずの要務と考えている。

## 心 の 痕 跡

桑 原 武 夫

ジャン・ジョレスは、あらゆる本を読み、それをことごとく忘れた偉い人であった。

アランの著作のなかに、こうした言葉を見出したとき、私はおどろき、そして嬉しかった。私は小中学時代は恐らくクラスでも、一、二をあらそう読書家だった。高校に進んでからは山岳部に入り、やや戸外派に転じたので、読書の時間は減ったが、趣味は変らなかつた。フランス文学で文学士になってからも、読書とは専門以外の本を読むことと心得て、濫読はやめなかつた。

しかし、一方、“知行合一”の思想が私の心のなかで次第につよまっていた。この憬れは前からあったのだが、わずかながらの登山行為とマルクス主義に動かされたジャーナリズムとの影響があったかも知れない。ともかく、書物によってえられた知識ないし知恵は人生での実践に役立って、はじめて価値があると考えたいのであった。これには人生に役立たぬ本はあまり読まなくてもよい、という含蓄があるので、怠け心に口実をあたえもし

たが、むしろ問題は、たとえば考古学の本とか中世の詩とかに没入する、読書における無償のよろこびといったものと、知行合一思想とをどう調和させるかであった。その解決に深刻に悩んでいたわけではない。ただ、その矛盾は心の底にいつもひそんでいたに違いない。アランの言葉が私をよろこばせたのは、その心の底に達したからである。

本は多方面にわたって、なるべくたくさん読むがよい。多方面に触手をのばすということ自体が、つかみとるものが何であっても、私たちの心をひろげる。読んだ内容をむりに覚えようとするには当たらない。忘れてしまってもよいのだ。しかし、心をこめて、夢中になって読んだものは、必ず心に痕跡をのこさずにはおかない。そうした痕跡線の交錯のえがき出す模様が、すなわちその人間の知的作業の基本形をなすのではなからうか。動物の脳のしわが多いほど高級とされるように、読書痕跡線も多いほどよいのである。私はおおよそこのようにアランの言葉を自己流に解した。

一般に、ヒューマニズムは、どこかに、科学的証明の彼方にある楽天主義をふくむものであるが、このヒューマニストの古典主義者アランの言葉も、神秘主義につらなる楽天主義をふまえているように思われる。雑学に終始して一生ロクな仕事をせぬ人間も多いのに、知的には“フランス革命史”の大作をのこし、行的には非業の死にいたる社会主義運動に挺身したジョレスひとり为例にとって、アランは生体的読書の無用の用を説くのである。

このテーゼの眼目は、私流にいえば、心に痕跡をのこす読方ができるか否かにある。この痕跡は今の知識心理学では十分説明できそうにないが、それは本の内容の細部ではなく、パターンのようなものと思われる。古代殷文明の本を読んで、国王の名とか、首都の位置とかではなく、史上最大の殉死を生むその宗教政治的権力の何とも表現しがたいような無気味さの感覚、それが心にのこるのである。その痕跡の有無が特定の条件の下では、きつと何らかの相違となって作用するにちがいない、と私は思っている。

美しい風景もまた心に痕跡をのこすのではなからうか、と実はひそかに考えている。まだ何一つ確認はない。しかし、ヒマラヤの巨峰の朝やけの神々しさ、真黒の岩壁にぶちあたる怒濤、眼路はるかな緑の牧野、こうしたものにうっとりと眺め入るとき、それが私たちの心に何らかの痕跡をのこし、それがその後の生活に作用しないとしたならば、人生は無意味のように思われる。人生とはこうした痕跡の堆積をいうのであろうから。

(人文科学研究所教授)

#### ~~~~~

#### 穴戸新館長を迎える

本学図書館の改善につくされた堀江館長の任期満了に伴い、その後任として、工学部の穴戸圭一教授を新館長に迎えた。本学では自然科学系からの館長就任は初めてのことであり、画期的なこととして、いよいよ図書館近代化の進展に期待がよせられている。

#### 京都大学雑誌総合目録の編さんに着手

全学の雑誌総合目録は、自然科学欧文編が1965年2月に刊行され(静脩第4号既報)、学内から好評を受けたが、今年度はそれに引続いて人文科学欧文編と、自然科学和文編、人文科学和文編の3編を刊行することになった。これは昭和41年7月1日現在、本学に所蔵する上記の雑誌について、調査を行ない収録するものである。目下各部局図書室の協力を得て、原稿カードの作成にとりかかっている。欧文編は本年末、和文編は来年3月に刊行の予定である。これが完成をみた暁には、本学の雑誌はさきの自然科学欧文編と合して、一応全部網羅されることとなり、長年の懸案が一举に解決されて、研究者に大きな利便をもたらすであろう。